



around the world

## コロンビア初の左派政権誕生

上智大学教授 幡谷則子

フランシア・マルケス副大統領の登場は、同国にとっては文字通り「歴史的変革」の第一歩となる。

G・ペトロは一九六〇年にカリブ海沿岸コルドバ県で生まれるが、首都ボゴダ近郊のシパキラ市に家族で移住した。そこで左翼ゲリラ組織「四月一日運動」(M-19)に加入し、プロパガンダ地下活動をしながら、二〇代で市議会議員となる。コロンビアでは一九六〇年代から左翼ゲリラの活動が活発であったが、M-19は一九七〇年の大統領選挙において左派政党ANAP(全国民衆連合)候補の優勢が認められなかったことから、伝統的二代政党体制に対する社会変革に挑んで発足した都市部ゲリラ組織であった。

一九九〇年にM-19は非武装化し、九一年の制憲議会以後、政党ADM-19(民主同盟M-19)として多元的民主主義をめざした。ペトロは奨学金を得てエクステルナード大学経済学部卒業後、大学院では環境問題や行政学も学んだ。並行して、九〇年代は国政下院議員として政治家のキャリアを積む。当時は非武装化した左翼ゲリラに対して右翼による暴力が拡大した時期であり、一時期は身の安全のために在ベルギー大使館員として派遣された(九四〜九六年)。九七年ボゴタ市長選に立候補して落選するが、二〇〇二年に下院議員となり、反政治汚職、パلاميタリズム(左翼ゲリラに対する準軍事組織による「自警」活動)への糾弾を続けた。その後左派野党PDA(もうひとつの民主主義の極)から上院議員を務め、二〇一〇年には初めて大統領選に立候補した。一二年には八〇〇万票の大量得票でボゴタ市長に選出された。その後一六年にも再度大統領選に立候補し落選。今回三度目の出馬について政権を勝ち取った。

二〇二二年八月七日、コロンビア史上初の左派政権、グスタボ・ペトロ大統領が就任する。彼とその右腕となる

まず、ペトロ政権発足の背景をみておきたい。一九九一年の制憲議会選挙を経て、コロンビアの二大政党体制は崩れなかった。反政府左翼ゲリラFARC（コロンビア革命軍）から市民政道の選んだUP（愛国同盟）の議員たちは数多く殺害された。左派政党の存在はあるものの、多元的民主体制とは言い難い状況下で、二〇一六年の政府とFARCとの和平合意に対する国民投票は、ウリベ上院議員（元大統領）率いる反対派が一％に満たない僅差で上回り、否決されてしまった。同年に修正合意が認められ、元兵士の武装解除・動員解除・社会復帰（DDR）過程が始まったが、国民の分断はいっそう顕著になった。

ペトロは二〇一八年の大統領選でドウケ現大統領と決戦投票で競り負けたが、上院議員として活動を続け、満を持して副大統領候補マルケスとともに

に出馬した。選挙は急浮上した右派ポピュリストのR・エルナンデスとの決戦となり、三％差でペトロが勝利した。FARCの非武装後も暴力に苦しむ沿岸地域や国境の辺境地域でペトロが勝利し、ボゴタを除く大都市を擁する内陸部は軒並み右派の勝利となった。決戦投票に残った二人の経歴からは、既存の伝統的政党への信頼失墜と「現状からの変化」を渴望する有権者の投票行動が反映された選挙であったと理解できる。

新政権にとつて、深まる分断の修復と国民和解、コロナ危機で深刻化した経済・地域格差の改善、左翼ゲリラELN（民族解放軍）との和平交渉再開などが喫緊の課題である。ウクライナ問題の経済に与える影響もむろんある。左派ペトロ政権の登場に対しては、コロンビアの極左化を危ぶむ声もあった。だが、新閣僚の顔ぶれからは、選

挙を戦った右派や中道左派を取り込み、分断から統合を図る賢明な舵取りが確認できる。周辺国の左傾化との連動というよりは、長年の硬直した民主体制に風穴を開けようとする流れではないか。

新国家計画は、社会と経済の中心に「生命（生活）」を置き、変革の担い手の中心に女性を位置付ける。気候変動との戦い、採掘主義経済からの脱却、諸権利の保障、真の平和などが主要命題として並ぶ。これらの課題への取り組みには、初のアフロ系女性として副大統領に就任する環境問題活動家マルケスの存在が鍵となる。

コロンビアの左傾化で最も周囲から注目されるのは対米関係と対ベネズエラ外交であろう。マドウロ政権との関係改善は明言しているが、国内の大量ベネズエラ難民に対する政策転換の有無が今後の争点となるだろう。●